

《書評》

Dominic Janes,

*Oscar Wilde Prefigured:
Queer Fashioning and British Caricature, 1750-1900*

Chicago and London: University of Chicago Press, 2016.

大久保 譲

『モンティ・パイソン』第3シリーズの最終回(1973)に、「オスカー・ワイルド・スケッチ」という一幕がある。セピア色の街並みに、まず「ロンドン、1895」、続けて「ミスター・オスカー・ワイルドの邸宅」とキャプションが出る。場面は客間に変わって、オスカー・ワイルド(グレアム・チャップマン)が、プリンス・オブ・ウェールズ(テリー・ジョーンズ)を前に、ホイッスラー(ジョン・クリース)、そしてパーナード・ショー(マイケル・ペイリン)と、ノンセンスな「ウィット」を競い合う。

パイソンの作品として特段優れているわけでもないこのスケッチが、それでも興味を引くのは、ゲイであるチャップマンが、ワイルドを、というよりも、1890年代に数々の諷刺画の中でカリカチュアライズされたワイルドの姿を忠実に再現＝表象しているからだ。偽りの天才とナルシズムを示す金メッキしたスイセンを左手に、刹那的な身体の欲望を象徴するかのような葉巻を右手に持って、ワイルドというクイアな記号を己の身体でなぞるクイアな俳優。

しかしドミニク・ジェインズによれば、当のワイルド自身が、諷刺画に描かれた「ダンディ」のイメージをみずからの身体でなぞることによって、クイアな自己形成(queer fashioning)を行ったのだという。例えば1882年のアメリカ講演旅行で、ワイルドは、ギルバートとサリヴァンの『ペイシェンス』でパロディ化された唯美主義者のパロディを演じた。そして『ペイシェンス』もまた、ジョージ・デュ・モリアの描く唯美主義者のカリカチュ

アに触発された作品だった。「こうしたコピーと再発明のプロセスを通して、何十年にもわたって複数の意味が上書きされていったのである」(Janes, p. 229)。

ジェインズの、*Oscar Wilde Prefigured: Queer Fashioning and British Caricature, 1750-1900*は、時の有名人として(さらには「犯罪者」として)繰り返りかえし諷刺画に描かれたワイルドのイメージが、それ以前の諷刺画の歴史において形成されてきた「女々しい男 (effeminate man)」の図像や、そこに含まれるソドミーの暗示を受け継いでいることを指摘する。「ワイルドのイメージは、18世紀以降の猥雑な諷刺画の伝統によってあらかじめ形づくられ (prefigured)、そこではすでにダンディ的なパフォーマンスがソドミー的な欲望と関連づけられていたのだ」(p. 2)。

アラン・シンフィールドはかつて「ワイルド裁判までは、女々しさとホモセクシュアリティは、それ以降のようなやりかたでは結びついていなかった」(*The Wilde Century*, p. 4)と述べたが、ジェインズは、シンフィールドの著作の重要性を認めながらも、ワイルド裁判がソドミーと同性愛アイデンティティを結びつける決定的な契機となった、という考えを採らない。「1895年の一連のワイルド裁判は今日もよく知られているが、決してユニークなものではなかった。本書の第1部で取りあげる18世紀の裁判記録では、はっきりと、ソドミーが(過剰に)ファッショナブルな男性と結びつけられていた」(p. 16)。

ワイルド裁判こそ同性愛アイデンティティを形成する決定的な契機であったとする1990年代のクイア批評に対しては、21世紀以降の研究によってさまざまな観点から批判や修正が加えられてきた。ある程度は本書もその流れに棹さすものだと言えそうだ。とはいえ、ジェインズは実証的な歴史学の立場から初期のクイア批評を見直そうというのではない。テキストを重視してきた従来のクイア批評を補うために、視覚文化研究の方法論を導入しようというのがジェインズの主張である。なによりも「その名を口にすることができない」愛を表現してきたのは、言葉ではなく、身体的なパフォーマンスではなかったか。「法的・社会的な危険に身をさらすのはもちろんのこと、そもそもそれを表現する十分な言語を持たない文化においては、同性に対する欲望は、しばしば暗示的なジェスチャーや言葉遊

び、服装、ふるまいといったものの組み合わせを通して、暗号のようにして伝えられる必要があった」(p. 22)。こうした暗号化された微妙な身体言語を、(しばしば悪意ある)誇張によって、はっきり見える形で表現してくれるという点で、カリカチュアは貴重なのである。しかも、現実とカリカチュアの表現は一方的ではないことを、本書は何度も強調する。「イメージやステレオタイプは、クイアな人々によってだけ、あるいは諷刺画家によってだけ作られたものではなく、両者の相互交渉によって生まれた」(p. 228)。要するに、「クイアなパフォーマンスと同性愛嫌悪のカリカチュアとは、分かちがたく関連しあった現象なのである」(p. 231)。

こうしてジェインズは、18世紀後半以降のファッションブルな男性たちと、彼らの「女々しさ (male effeminacy)」を揶揄した諷刺画をたどり、そこに埋め込まれた同性愛的欲望／同性愛嫌悪を解説していく。

第2章では、グランド・ツアーに出かけて大陸ふうのファッションを身につけてきた「マカロニ (macaroni)」たち、とりわけホレス・ウォルポールとその友人たちが取りあげられ、舞台や諷刺画で彼らがどのように描かれたのかを論じる。「マカロニ」のひとりロバート・ジョーンズは、1772年、実際にソドミーで裁判にかけられ、フィレンツェに亡命することになる。「1895年のオスカー・ワイルド裁判は、ロバート・ジョーンズとそれを報じるメディアによって、予見されていた (prefigured) ののである」(p. 47)。第3章は18世紀後半のもうひとつの「女々しさ」のありかた、ヘンリー・マッケンジーの小説(1771)のタイトルを借りて「感情の人 (man of feeling)」の図像学だ。ジョウゼフ・ライト・オブ・ダービー描くサー・ブルック・ブースビーの有名な肖像画の分析から、ルソーとも親交のあったこの人物のセクシュアリティの曖昧さ(ベネディクト・ニコルソンは彼を「18世紀のオスカー・ワイルド」と呼んだ)を読みとっていく。感受性と共感の時代とはいえ「男の感傷性は、行きすぎると、一種の感情面での異性装とみなされた。伝統的な女性の涙もろさが模倣されているのだと」(p. 67)。第4章で18世紀前半を総括し、第1部は終わる。

第2部は第5章、摂政時代の「ダンディ」の分析から始まる。ポー・ブランメルに代表されるダンディは、前世紀のマカロニとは異なり、節度ある服装をよしとしたが、その「自己への配慮」もまた、女々しさのひとつの

表れと疑われる。身づくろいに余念がないダンディたちは、服装を除けば女性と区別がつかない身体を持つ存在として描かれた。折しもカリカチュアの全盛時代、アイザック・ロバートとジョージのクルックシャンク兄弟は頻繁にダンディを題材にしたが、彼らの諷刺には「恐怖と嫌悪だけでなく、それに強く惹かれる気持ちも含まれていた」(p. 119)という。第6章「バイロン主義者たち」の主題は19世紀前半のダンディたち、特にロード・ブルームと若き日のディズレーリ、そしてブルワー＝リットンである。前時代のダンディ表象を受け継いだ諷刺画の中で、彼らが「女性化」されていた経緯が論じられる。

ヴィクトリア時代後期を扱った第3部の中心がオスカー・ワイルドである。第8章は主にキャリア前半の、唯美主義者としてのワイルドを扱う。デュ・モーリアの諷刺画や『ペイシェンス』のワイルド像は、これまで検討してきた「マカロニ」や「ダンディ」のイメージに多くを負い、一方でワイルド本人も積極的にバイロンの「ダンディ」「天才」のポーズを利用していたことが確認される。第9章では1890年代、「男らしい」新しい女に対して、「女々しい」新しい男が『パンチ』などの諷刺画に登場したことが指摘される。同じころ、若い男性の取り巻きを連れ歩くようになったワイルドに、一度は下火になっていた諷刺が再び向けられ始めた。こうした文脈を踏まえ、裁判前後のワイルド像、とりわけオーブリー・ピアズリーとマックス・ピアボーム——それぞれが、やはり曖昧なセクシュアリティの持ち主である——の手になるカリカチュアが読みとかれる。

ワイルドの視覚表象には18世紀以来のカリカチュアの伝統が影響を与えている、という本書の主張の骨格はいたってシンプルだ。とはいえ、それを裏づける豊富な図像とその解釈、ここでは省略した派生的な議論(ボクシング選手の身体の意味、東洋と「女々しさ」の関係など)の面白さもあって、非常に読みごたえのある研究になっている。

ちなみにジェインズは、本書に先立って、併せて読まれるべき2冊の著書を上梓している。まず *Picturing the Closet: Male Secrecy and Homosexual Visibility in Britain* (Oxford University Press, 2015)。イヴ・コゾフスキー・セジウィック『クローゼットの認識論』(1990)を前提に、同性への欲望が視覚文化においてどのように表現(あるいは抑圧)されてきたかを、ホガー

スとエドモンド・バークに始まり、セシル・ビートンやデレク・ジャーマンまで俎上に載せて分析されている。当然、*Oscar Wilde Prefigured*の議論と重なりつつ、20世紀以降も射程におさめている点で、ジェインズの現時点での主著と言えるだろう。もう1冊は同性愛アイデンティティとキリスト教の「殉教」概念との関係を吟味した *Visions of Queer Martyrdom from John Henry Newman to Derek Jarman* (University of Chicago Press, 2015) である。同書の第5章“Saint Oscar”は、*Oscar Wilde Prefigured*とは全く異なるアプローチのユニークなオスカー・ワイルド論だった。クイアな視覚文化論の書き手として、今後も注目したい。